



# 僕の嫁の、物騒な 嫁入り事情と大魔獣 2

ALPHAPOLETS

かっぱ同盟  
*Kappa-Doumei*

アルファライト文庫 



**オリヴィア・レッドバルト**

名門レッドバルト家の若奥様。学生時代はリノと同じA班の班長だった。

**サンドリア・レカクーダ**

砂と水を司る大魔獣。正体は青い牡鹿。

**フィオナルド・コレ**

元A班メンバーの、天才宮廷画家。

**マルゴット・プロロフィーナ**

風を司る大魔獣。正体は巨大な白狼。

**クラウス・ドーナ**

リノの同僚で、学生時代からの友人。真面目そうな割に、かなりがさつ。

**チェーリーエ・プリズ**

元A班メンバー。可愛い物好きの変わり者。

**リノフリード・グラス**

冴えない没落貴族の主人公。王からの命を受け、ベルルを嫁に迎える。

**ベルルロット・グラス**

三匹の大魔獣を従える、旧魔王の娘。地下牢に閉じ込められていたため、無垢で世間知らず。

主な登場人物

## 1 大魔獣と大魔獣

私の名前はマルゴット・プロロフィーナ。

旧魔王に仕<sup>つか</sup>えていた十の大魔獣に数えられている、白い毛並みが自慢の、イヌ科系の魔獣。ちなみに雌<sup>めす</sup>。

自分で言うのもなんだけど、大魔獣の中では可愛<sup>かわ</sup>がられ上手、甘え上手、世渡り上手の、気の穏やかな魔獣だと思う。

そういった意味で、旧魔王様には信頼<sup>しんらい</sup>されていた。

今は旧魔王様の娘であるベルロット様と契約し、彼女をずっと見守っている。それが旧魔王様との約束でもある。

私たちの可愛いベルル様は、最近ある男の元に嫁<sup>よめ</sup>がれた。

リノフリード・グラススという、没落貴族の若い当主である。

今日ベルル様とその男は、この国の重鎮<sup>じゆうちん</sup>であるレッドバルト伯爵<sup>はくしやう</sup>のお館<sup>やかた</sup>を訪<sup>おもむ</sup>けている。

さて、ベルル様の旦那になったこの男、没落貴族とは言え、出で立ちに品があり、清潔感もあってそこそこ見映えも良いのだが、どこか哀愁が漂い、表情の変化にも乏しい。要するに、地味な男なのだ。

ただベルル様はこの男を大変気に入っていて、出会った時から「旦那様、旦那様」とくっついてまわっている。

最近はこの「旦那様」のおかげで身の回りも綺麗に整えられ、ベルル様は健やかな日々を送り、笑顔も多くなった。

地下牢に居た頃は、私を含めベルル様と契約した三匹の魔獣と、看守のおじいさんだけが話し相手だったのに、私たちのベルル様はいまや一人の男のものとなってしまった。少し寂しい気もするけれど、私はベルル様が幸せそうなのでそれで良いと思っている。

旦那様はベルル様を大切にしているようで、夫婦となって数ヶ月が過ぎたというのに、全く手を出さない。

旦那様が単純にヘタレなだけかもしれないけれど、確かにベルル様のような無知で無垢な少女には積極的になれない気持ちも、分からなくもない。

しかし今朝、いよいよ旦那様とベルル様は共に湯浴みに行かれたようだ。

「あああああ、あああああ、ベルル様ベルル様ベルル様ベルル様があああ……うわあああああ」

「うるさいサンドリアお姉様。たかが湯浴みくらいで」

「だって、だって……あのクソ野郎がベルル様の生肌を……うあああああああ」

「お姉様、ただ羨ましいだけでしょ。まったく草食動物のくせに」

彼女は、ロークノヴァという上のお姉様の呪いによって姿を変えられ、私のお兄様でありながら、お姉様ともなった三匹の大魔獣の一匹、サンドリア。ベルル様と旦那様が湯浴みに行かれてから、ずっと号泣している。

サンドリアお姉様のベルル様に対する愛情は、私のそれとは少し違うみたいで、どうにもこうにも……

「サンドリアお姉様、ベルル様もう子供じゃないんだから。旦那様だってベルル様を大切にしてくださいさっているし、何をそんなに目の敵にする必要があるの？」

「うるさいうるさい!! 男はみんな狼なんだ!! 野蛮なんだよおおお」

「私は女の子だけど狼みたいなものよ」

「そういう話じゃないんだよ!!」

美少女の面して、地面をどんと叩きながら号泣する哀れなお姉様。

ベルル様と旦那様が湯浴みに行ってしまった事が、そんなに悔しいのか。

「お、俺も行く……俺も子鹿だし……マスコットみたいなものだし」

「駄目よお姉様。何考えてるのよ」

お姉様の着物の襟を掴む。ゲートを越えさせないように。

ここは魔界と人間界の狭間の狭間のような空間で、言ってしまうえば待機場所のようなものか。  
「お、部屋に人が来たぞ……あれは……」

ベルル様と旦那様が寝泊まりしていた部屋に、一人の女性がやってきた。  
その女性を見た瞬間、私は瞳の色を変える。

アプリコットブラウンの、ウェーブのかかった髪を結び上げ、真っ黒な衣服と白い前掛け、眼鏡を身につけた、キリッとした女性。

「出ていらつしやいませ……マルゴット様にサンドリア様」

女性はそう言って、次元の狭間のこちら側を見て微笑んだ。

私は知っている。

彼女の名前は、カルメン・ダイアリーヤ。

「お久しぶりね、カルメン」

ボワンと音を立てて人間界に出現し、人型の姿のままベッドに座り込む。

昨日、この屋敷に来た時に見た、侍女長をしているカルメンという女性。似ているな似ているなと思っていたが、やはり私たちの知っているカルメンだった。

「お前……こんな所に居たのか」

サンドリアお姉様も出て来て、ベッドの上で腕を組んであくらをかいている。



「あら、サンドリア様。いったいどうなさったのです。魔界でも指折りの色男だったあなたが、そのような可愛らしいお嬢様に……」

「い、色々あったんだよ!!」

サンドリアお姉様はムスツとして、フンとそっぽ向いた。

しかし美少女姿なので普通に可愛い。

「それにしても十二年ぶりね。大魔獣の一体に数えられたあなたまで、こんな所で……いったい何をしているの?」

私は瞳を細め、彼女を見た。

彼女は一応、私たちの元同僚と言える。大魔獣の位<sup>くらゐ</sup>としては、私たちより下になるけれど。カルメンは「ふふふ」と意味深に笑って、黒いスカートの裾を摘<sup>つま</sup>んで軽く会釈。

ポワンと音を立てて現れたのは……可愛らしいアライグマだった。

「出たなタヌキが!!」

「あら、久々ねその姿」

私は目の前に現れた小さなアライグマを抱え、顎<sup>あご</sup>の下を撫<sup>な</sup>でた。

カルメンのちっさいバージョンは、小アライグマなのだ。

「おいしそうね……」

「おやめください、マルゴット様」

カルメンは鋭い爪を立ててシャツと引<sup>ひ</sup>つ掻<sup>か</sup>いて来た。

この乱暴なアライグマめ!!

「ゴホン……えー……何が言いたいのかといえますと……」

ポワンと音を立て、再び侍女の姿<sup>すがた</sup>に戻るカルメン。

「実は、現在私はこの館の主人、レッドバルト伯爵様と契約しております。しかし伯爵様は大きな魔力を持っている訳ではないので、私が大魔獣としてこちらに召喚される事はないでしょう。あしからず」

「……いやいやいや、なんであのタヌキ親父とお前が契約しているんだよ!! タヌキ同士

だからか!？」

サンドリアお姉様がベッドを叩きながら甲<sup>かたか</sup>高い声で叫ぶ。

お姉様の声はとも耳に響いて、うるさくてたまらない。

実は、私たちはあのレッドバルト伯爵を良く知っている。あの男は若い頃、東の最果<sup>さいは</sup>ての国の旧魔王様の元に居<sup>こゝ</sup>た時期があるから。

「全ては、旧魔王様の御遺志<sup>ごゐし</sup>です。それ以上の事は……まだ言えません」

「……あんた……」

「しかしマルゴット様、サンドリア様。本来全て魔王様と共にあるべき私たち十の大魔獣の契約は、旧魔王様によって分散させられております。お気をつけくださいませ……いっ

たいどういった形で私どもが出会うのか……分かりませんから」

カルメンは再び意味深にそう言ってから、少し悲しそうに微笑む。

サンドリアお姉様は眉間にしわを寄せ、怪訝な顔をしている。

「いったいどういす事だ。旧魔王の契約は、俺たち以外はみんな今の魔王に移ったんじゃないのか」

「……今の魔王様は、二つの契約しか持っておりません」

「……それって」

私もサンドリアお姉様も、その事は全く知らなかったので、少し驚いてしまった。

それはつまり、今の魔王の元には、力の象徴である大魔獣が揃っていない事になる。

私がカルメンにあらゆる事を聞いたただそうとした時、カルメンが人差し指を口に添え、私に黙るよう目配せした。

つられて耳をぴくりと動かし、旦那様とベルル様がすぐそこまで戻っている事を知る。

「……ベルル、大丈夫か？」

「うーん……のぼせちゃったのかしら……」

ベルル様たちの声が聞こえる。

私はサンドリアお姉様の襟を掴んで、急いで魔界へ戻った。

帰り際にカルメンの、相変わらずの微笑みを横目でちらりと見て。

彼女は深く頭を下げ、私たちを見送った。

カルメンが伝えたかった事は、何なのかしら……

次元の狭間から人間界を覗いてみると、どうやらベルル様はのぼせてしまったようで、どこかぼわわとしている。旦那様も部屋に居るカルメンに気づいて、話しかけた。

「ああ……カルメンさん。すみません、色々と片付けてもらって……」

「いいえ……お湯加減はどうでしたか？」

「ええ。とても素晴らしい浴場で……ただ、ベルルが少し……」

「まあまあ、奥様。今すぐ冷たいドリンクをお持ちいたします」

「すみません」

旦那様がベルル様をソファに座らせ、手のひらでハタハタと風を送っているが、ベルル様は相変わらず顔が赤い。

旦那様をチラッと見では、目をパチパチさせて俯きがちになる。

「……………?」

何だかな。

これはのぼせているというよりは、どこか乙女チックな……

「ベルル様が何かおかしいぞ」

「サンドリアお姉様はベルル様の事になると、目敏いわね」

「ま、まさか……まさかあのヘタレ野郎……っ、ヘタレのくせに、ヘタレのくせにベルル様に……あんな事やこんな事を……っ!!!」

あわあわガタガタと、考えたくないのに妄想してしまいうらしい、あれこれ。

お姉様はまるで思春期であるかのように興奮しているけれど、うるさいので無視。

「ベルル……もしかして、さっきの……その……意識していたりするののか?」

「……え?」

「もしかして、嫌……だったりしたか……?」

「そ、そんな事ないわ!!」

ベルル様は真っ赤になったまま立ち上がって、胸の前でぎゅっと握った拳を振る。

「全然、嫌じゃっ、なかったわ!!」

「……そ、そうか」

はてさて、いつたいあの二人に何があったのだろう。

うーん、オネエサンは興味津々だわ。

しかしサンドリアお姉様は一人「うああああ、何してくれたあんぼんたん!!」と、頭を抱えている。

ベルル様は戸惑いがちに、口元に手を当て、旦那様を見上げた。

「旦那様……私の事、可愛いって思ってくれたの?」

「……え?」

「だって……だってキスは、可愛いと思った時にするんでしょう?」

「あ、ああ。そうだな……そうだ」

「だったら……だったら、可愛いって思ってくれたら……また、キスしてくれるの……?」  
ベルル様の上目遣いを前に、旦那様は瞬きもしないで固まっている。

「私、頑張つて、また旦那様に可愛いって思ってもらえるようになるから……っ。そしてら……そしたら……っ」

真剣に、一生懸命に、必死になってそんな事を言うベルル様。

旦那様はいよいよ口を押さえて顔を背けた。

これ絶対、たまらなく可愛いと思っているに違いない。

だって私もたまらなくベルル様を可愛いと思いましたもの。私だったら今こそガバツと  
ですわ……

「許さんあの男。今すぐ俺が滅殺してくれる……」

「サンドリアお姉様、空気を読んでちょうだい」

「だって!! だってマルゴットオオオオ……っ」

「はいはい、落ち着いて、お兄様。つたら……」



地に伏せて泣きわめくサンドリア。お兄様<sup>〃</sup>の背を撫でながら、私は人間界に居るベル様と旦那様を見守った。

旦那様がベル様の子期せぬ攻撃にやられていた時、カルメンがタイミング良く冷たい林檎のジュースを持って来た。しほりたての、とても美味しいものらしく、ベル様はひと口飲むとすぐに気に入って、のほせた事などすっかり忘れてしまっていた。

「というか、今度は旦那様がのほせてしまったような、ぼやぼやした感じになっている。まあ、さっきのベル様の無自覚な攻めの前では仕方がないか。」

「旦那様も、可愛い人よね」

「は!? どこが!？」

サンドリアお姉様は着物の袖そでを噛かんで悔しそうにしているけれど、私はニヤニヤと見守る事にしよう。

ベル様にとって旦那様が大切な存在なら、私はベル様と旦那様をお守りするのだ。

## 2 任務

僕、リノフリード・グラスはレッドバルト伯爵の長男にして友人のジュラルと話し合

い、この屋敷にやってきた本来の目的をやっと果たす事が出来た。

そう、先日のスラム街の出来事を含め、以前レッドバルト家の別荘で巻き込まれた妖精密猟事件について、色々と言いたい事、聞きたい事があったのだ。

ベルルは別の部屋にて、ジュラルの妻のオリヴィアが面倒を見てくれている。

「これを見てくれ」

僕は、虫かごに入れて持って来ていた丸頭の妖精を、ジュラルの前に出した。

ひと晩放置していたが、虫かごにはベルルの作ったお菓子を沢山入れておいたので、妖精はむしろまったりとくつろいだ表情だ。入れる時はあんなに喚わめいていたのに。

「ほお……妖精じゃないか。捕まえたのか?」

「違う。こいつは、二日前の夜にスラム街で暴漢ぼうかんに襲われた後、ベルルのドレスにくっ付いていたんだ。その時は酷ひどく怯おそえていて、ベルルに何かを必死になって訴えていた。ベルルは、妖精の申し子<sup>〃</sup>だからな……」

「……なるほど。その妖精はスラム街から付いて来たという訳か。奥方を頼って、いったい何を訴えていたと言うんだ」

僕は昨日の朝、我が家の庭師であるレーンに通訳してもらった言葉のメモを取り出した。

『暗いよ怖いよ。真っ黒の四角い箱の中に詰め込まれるよ。  
ミキサーにかけられて保存料をもみ込まれるよ。  
丸い黄色いゼリーにされるよ。  
お助けくださいお助けください妖精の申し子』

レオンは確かにこう訳した。

「うちの庭師が訳してくれた妖精の言葉だ。まだ若い庭師だから、どこまで合っているかわからないが、とても気になる部分がある」

「……なるほど、真っ黒の四角い箱……か」

「そうだ。以前、レッドバルトの別荘に滞在した時、密猟者の事件があっただろう。奴らは妖精を黒い箱のようなものに閉じ込めていた」

ジェラルは顎に手を当て、目を細める。

「僕が思うに、この丸頭の妖精は密猟者から逃げて来たんじゃないだろうか。そして……密猟者とスラム街は、何か関係があるんだと思う。奴らが僕らに絡んで来たのも、以前別荘での件があったからじゃ……」

「なるほど」

ジェラルは落ち着いた様子で、優雅に紅茶を飲みながら頷いた。

「なんだ……そのくらい騎士団でもつかんでいると言いたげだな」

「……まあな。君たち夫妻を一日ここに留めたのも、実は理由があったり無かったり……」

「……?」

「これを用意してたんだけ」

ジェラルが指をパチンと鳴らし、側に控えていたカルメンさんに合図する。

するとカルメンさんは隣の部屋に向かい、何か小瓶のようなものを銀の盆に載せてやってきた。

小瓶の中にはキラキラした、黄色いゼラチン質のものが入っていた。

「これ何だと思うかい？」

「……何だ？ 見た事がないな」

「ははは。これは、妖精だよ」

「……!？」

僕が驚いたのと同時に、さっきまで虫かごの中でゴロンと転がって自堕落にしていた妖精が、その小瓶に気がついて、ガタガタ震えだした。

そして「シギーシギー」と鳴き喚く。

「どういう事だ。それが妖精だって!？」

「君の所の優秀な庭師君の訳の中にもあっただろう？ 妖精はこのような黄色いゼリー状のものに加工されているんだ。昨日やっと、この現物を手に入れる事が出来た」

「信じられない……いつたいなぜこんな事を!! そもそも、こんな事が可能なのか……っ」

そしてこれは、許される事なのか。

妖精は、自然界の恩恵が具現化されたような存在だ。

自然界の恵と言えるエネルギーが、意志を持った存在。それは生命体なのかと言われるととても難しいが、とにかく僕ら人間がどうこうしていい存在ではない。

「まあこれだけ見せられても信じられないだろうが、そうだな、少しだけ試してみるか」

ジェラルはその小瓶の蓋を開け、細い金属のスプーンで、ゼリー状のものを僅かに掬う。それからカルメンがいつの間にか持つて来ていた枯れた苗の鉢に、それを落とす。

すると、枯れたはずの苗がみるみるうちに、生氣を取り戻したのだ。

「……何だと……」

「妖精の恩恵を凝縮したものが、この黄色いゼリーだ。妖精に死と言う概念は存在しないから、これは単に姿形を変えたものと捉えた方が良いだろう。つまりこうする事で、普通なら人間が操作する事の出来ない妖精の恩恵を、意図的に利用する事が出来るようになる。妖精の……自然界の「意志」という部分を完全に取り除いてしまつてな」

ジェラルは淡々と説明する。

「そ、そんなの……世界の理に反する事だ!! 妖精は自然界の意志だ。その意志の部分を取り除くなんて……恐ろしい。どんな災いが起こるか分かつたものじゃないぞ!!」

「その通り。確かに我々は、人間ではどうしようもない部分を妖精に助けられながら生きてきた。しかし、その救いの手は妖精自らの意志で差し伸べられなければならない。このように捕らえられ、身動きの取れない姿にされ、まるでただの消耗品であるかのように大量に製造されるなんて、世界の理に反する。あつてはならない事だ」

「奴らはこれを作り、いつたいどうしようとしているのだろうか……」

「勿論、売り物にするのさ。用途は色々。何にだつて役に立つ……既に、闇市では僅かながら出回っている。しかしどうやら、奴らが商売の相手になっているのは異国のようだ」

「……異国?」

「ああ。我が国は妖精に愛された国だが、世界には妖精にそつぽを向かれた国も沢山ある。特に東に行けば行くほど……スラム街に異国の者が多くなつただろう? ほとんどは難民だが、それに紛れて外国の商人もやってきている」

「そこまで分かっているのか……」

僕は、いつもよりよほど真面目な顔で説明するジェラルの、その言葉のひとつひとつに驚きつつ、しかしいくつかの部分は妙に納得してしまつた。

僕だつて日頃から、どうしたらうちの畑や庭に、妖精が沢山やつてくるだろうかと考える。

妖精は住み良い場所を求め、移動したり、居心地のよい場所に住み着いたり、そうかと思つたらいきなり居なくなったり、かなり気ままたな存在だ。最近はベルルのお菓子のおかげで、随分うちの庭にも集まって来たが……

ただ、彼らを無理矢理閉じ込めたり、強制的に居座らせようなどは考えた事も無かつた。それは無理だと分かっていたからだ。彼らには彼らの意志があるから……

「……意志を、取り除いたのか……」

そこで、彼らが勝手を出来ないよう、ゼリー状の固形物にしてしまった訳か。

僕は小瓶に収められた、もの言わぬゼリーと、虫かごの中に居る妖精を見比べた。確かに今、この一匹を虫かごに入れてしまっているが、妖精はその気になれば虫かごからなんですぐに逃げられる。こいつは僕らに助けて欲しい事があるから、虫かごの中に居座り続けているのだ。

丸頭の妖精はゼリーを見て、しくしく泣いていた。

仲間がこのようになると、妖精も悲しいのだろうか。

「そもそも、いったいどうやって妖精をこのような形に変化させたのだろう。全くどんな技術か分からない」

僕の呟きにジェラルが頷く。

「騎士団の情報によれば、どうやら妖精をそのようなゼリー状に変化させる為の魔法薬

品があるようだ」

「薬品？」

「ああ。何種類かあるらしい。それを使ってどこかでこっそり、妖精ゼリーは製造されている。我々はその製造工場を探そうとしているのだが……これがなかなか見つからない。スラム街の中にあるものだとばかり思っていたが、どうもそういう訳ではないらしい」

「……？」

ジェラルはふうとため息をついて、ひと口紅茶を飲んだ。

僕もつられて飲む。色々と考えながらなので、味は分からないが。

「そこで、この件を担当する我々第七騎士団としては、魔法薬学に精通している王宮魔術師の第三研究室より数名の力を借り、この妖精ゼリーを、もとの妖精に戻す薬を開発して欲しいと考えている。ただ、この研究は極秘で行わなければならない。できれば……リノ、君をリーダーとして研究チームを作りたい」

「……え？」

僕は思わず眉を寄せた。

そのように大事な案件であれば、第三研究室にも、もつと頼もしい偉い先生方がいるだろうに。

ジェラルは僕が戸惑う様子を見て、また何度か頷いてから困ったように笑う。

「リノ、君は自分を、たかが一若手研究員だと思っているのだから、実は周りはそのように思っていない。君は特別だ。魔法薬の作り手を代表する一族の生まれであり、大きな薬草の庭を持ち、知識も技術も申し分ない。第三研究室の室長も、君なら問題ないだろうと言っておられたし、こちらの研究にかかり切りになる事も了承済みだ。君はこの事件と何度も関わりを持っているし、それに何と言っても……君の奥方は妖精の申し子じゃないか」

「……それが、何か関係でもあるのか」

「妖精の申し子がどれほど貴重な存在か、分かっているだろうか？ 君と、君の奥方は、何だろうな……関わるべくしてこの事件に関わっている気がするんだ」

「……？」

ニヤリと、意味深に笑うジェラル。いつもはあんなに陽気で適当な態度を取るのに、やはりこういう時は、さすがあの伯爵の息子だなと思う。

僕は少し前屈みになって、長く息を吐き、その間に考えをまとめようとした。

「……まあ、僕もこの件に関して、色々と気になる事もある。妖精をゼリー状から元に戻す薬の研究は前代未聞で難しそうだし、大きな責任も伴うものだ。僕のような若造に、研究チームのリーダーが務まるのか分らないが……」

ぎゅつと膝を握って、ゆっくり頷く。

「そうだな……この話を引き受けなければ、ベルルがまた悲しむな」

僕はふと、ベルルの事を思い出した。

昨日、彼女は妖精の喚く言葉の意味を知って、どこか不安そうな顔をしていた。そして、妖精を助けたと言った。

僕は今まで、妖精を自然界の一部のように感じ、そこにあって当たり前存在だと思っていた。沢山居るとありがたいが、悪戯はするし厄介だなと感じる事もあった。特別可愛いと思つた事もない。

ただベルルが屋敷に来て、妖精が彼女に群がっては、彼女に自らをアピールしたり、彼女を好んでいるのを見るにつけ、妖精に少し親近感を抱くようになった。妖精の個別の意志というものを、しっかりと感じるようになったからだろう。

彼らに生や死の概念があるのが無かろうが、妖精ゼリーなどという人間の都合に合わせて残酷なものを作り出し、妖精の意志を排除する行為は、決して許される事ではない。

何より、この妖精ゼリーの話を聞いたら、ベルルがどれほどショックを受けるだろう。

彼女は、妖精を愛しているから。

そして僕は、考えた末にこの研究チームの話を引き受ける事にした。

豪華なランチを頂いた後、僕とベルルはグラスの館へと戻った。

たった一日、レッドバルト家に泊まっただけなのに、とても長い間滞在したかのようにだ。

「旦那様……お疲れね」

「ああ、色々あったからな。でも、明日からもきつと忙しくなる」

自室のソファに座り込み、僕はこれからの事を考えた。

ベルルがティーセットを持って来て、僕の分をティーカップに注いでくれている。

第七騎士団からの要請で、研究チームのリーダーを任される事になった。普通なら、これは喜ぶべきチャンスだ。

自分の力が認められたからこそなのだから。

「ただ……あまり忙しくなると、家に戻ってこられなくなるかもしれないな」

「……え」

ポツリと言うと、ベルルはとても悲しそうな顔をした。

そういった顔にさせたくて言った訳ではないので、僕は慌てて。

「いや……っ、かもしれないという話だ。まだそうなると決まった訳ではなく……その……」

「……でも、とても重要なお仕事なのでしょう？ 私、旦那様たちがお話しているとき、オリヴィアさんとパフェを食べてお話ししていたのだけど、オリヴィアさんが言っていたわ。旦那様は、次にとても大きなお仕事を任されるって。でも、このお仕事はグラスシ家に良いものをもたらすかもしれない、って」

「……」

「私、私、旦那様を応援するわ。私、旦那様の奥さんなんだから。旦那様がお仕事、ちゃんと頑張れるように……私に出来る事があつたら、何でもするわ」

「ベルル……」

でもどこか半べそのベルル。

まだ、どうなるかも分かっていないのに。

ああ、無理だ。こんなベルルを家において、仕事忙しいからと放っておける訳がない。「ベルル……大丈夫だ。どんなに忙しくなっても、定期的のうちには帰るようにしよう。それに、この研究は妖精を救う為のものだ。後で君にも説明しなければならぬだろうが、妖精は今、とても危険な目にあっている。それを助ける為の薬を、僕は作り出さなければならぬ」

「……妖精を助ける為の薬？」

「そうだ。この研究で成果が出れば、グラスシ家もまた……少しは見直してもらえらるだろう。ベルル、君にももつと、良い思いをさせてあげる事が出来るかもしれない。……い、いや、僕がちゃんと、成果を出せればの話だが……」

言いながら、だんだんと本当に出来るのか不安になってくる始末。

ベルルがグラスシ家に不満を持っていないのは当然知っているが、評判の悪い家よりはやはり、評判の良い家の嫁の方が良いに決まっている。と言うか、僕がそうであって欲し

いのかもしれない。

ベルルが嫁いだのは、評判の良い家の、結果を出した男のところだよ、と。

まあ遠い夢物語なのかもしれないが。

「大丈夫よ!! 旦那様なら、きつと出来るわ!!」

よく状況が分かかっていないベルルだが、僕の口ぶりから何かを察し、すぐ側に寄って来て、隣に座った。

そして、僕が膝の上に置いていた拳に、そつと自分の小さな手を添える。

「旦那様なら出来るわよ!! 私、ちゃんと知っているもの。旦那様のお薬が、良いものだって。旦那様のお薬が、沢山の病氣の人を救っているって。旦那様の作った肥料が、お庭の植物をあんなにみずみずしく育てているのよ。畑の作物を、あんなに美味しく育てているのよつ。私は妖精たちを呼び寄せちゃう体質だけど、妖精がこのグラスリス家のお庭や畑に沢山居るのは、それだけじゃないのよ。旦那様だって、お薬を通して、妖精たちにとっても好かれているのだから……つ!!」

「……」

「旦那様だったら、妖精を助けるお薬……絶対に作れるわ!!」

僕を見上げるベルルの瞳は、僕の力を全く疑っていない。

彼女は必死になって続ける。

「私も……旦那様が何もかも上手くいくように、お手伝いするわ。妖精の事なら、私、お手伝い出来る気がするのよ」

「……ベルル」

「旦那様。旦那様は既に私の自慢の旦那様だけど……でも、私は……私だって、旦那様の自慢の奥さんになりたいのよ? ま、まだ何にも出来ないし、ほど遠いかもしれないけれど……でももう少し待ってね、ちゃんと、自慢に思ってもらえるよう、刺繡ししゅうも、お料理も、お掃除も出来るように……つ」

僕はベルルを、ゆっくり抱き寄せた。

ベルルはこんな事を言っているが、彼女は既に、僕にはもつたないほど良い妻である。確かに彼女はまだ、何にも出来ない。何も知らない。

普通の女性が出来るあらゆる事がまだまだ未熟だが、僕がずつと欲しかったものを与えてくれる唯一の人である。

「ベルル……ありがとう。君は凄いな……僕の欲しいものを、いつも与えてくれる」

「……?? 私、まだ何にも、旦那様に与えていないわ。貰もらってばかりだもの……」

「そんな事はない。君が居れば、僕はこれからも頑張れそうだよ。でも……君が居ないと頑張れそうにないから、やつぱり僕はうちへ帰ってきそうだな……」

ベルルは僕の胸に体を寄せ、なぜかポロポロ泣き出した。

「旦那様……また何日も、お家へ帰れなかつたりするのね……っ」

「ん？ いや、だから、ちゃんと帰ってくるから……そんなに悲しむほどの事でもないぞ。……さ、寂しいのか？」

「……うん」

口元に手を当て、コクコクと頷くベルル。

ひつくひつくと肩を揺らし、涙が止まらない様子だ。ああ……本当に寂しがってくれているんだな。

「で、でも……私、決めたんだもの。ちゃんと旦那様を応援して、支えなくっちゃ。旦那様のお仕事……絶対に上手くいくんだから……っ。それまでは……」

「ベルル、そう泣かないでくれ。まるで僕が単身赴任でもするみたいだな。数日帰ってこられない事が何度かあるかもしれないというだけだ。かもしれないって話だぞ？」

とは言え、きっとベルルも分かっているのだろう。

僕が仕事にかかりきりになると、僕と共にゆつくり出来る時間も、一時お預けだという事を。

駄目だな。妻が可愛すぎると、それはそれで、仕事に支障が出かねない。

「ベルル……顔を上げてごらん」

「……？」

ベルルは言われた通り、涙で濡れたその顔を上げた。

僕は、彼女の頬に伝う涙を拭<sup>ぬぐ</sup>って、そっとキスをした。

ベルルは突然の事に目をパチパチとさせて、その度にポロポロッと、涙を流す。

「……だ、旦那様……？」

「その……言っただろう。可愛いと思った時に、キスをする……ちよっど今、そう思ったんだよ」

いや、いつもベルルは可愛いのがっ!!

でもあれだ。夫の成功を祈りつつも、励ましつつも、仕事で忙しくなって、かまってもられないかもしれないと悲しく思っ<sup>て</sup>、泣いてしまうなんて……ああ駄目だ駄目だ。可愛すぎる。

「か、可愛い……??？ 本当……??？」

「ああ。君はとても可愛い。……うん」

「……っ」

ベルルは恥ずかしいのか嬉しいのか、ポフツと真つ赤になったまま、力が抜けたようにクテンと僕に身を任す。

「だ、旦那様……その、旦那様……私の事……」

そして、ベルルは何かを聞こうとして、でもなぜかそこから言葉が続かずに、ゆつくり



首を振った。

一瞬ぐつと、何かを呑み込んでから、彼女は僕を見上げてニコリと笑う。目の端に溜まった涙が、キラリと光って美しい。

「ふふ……旦那様っ!!」

ベルルはいきなり僕の首元に手を回し、ギュッと抱きついてくる。

「こ、こら、ベルル……」

「ふふっ」

「……?」

彼女は何を言おうとしたのだろう。

最近分かった事だが、彼女がこうやって首元に抱きつくのは、背をギュッと抱きしめられた時だ。

そしてこれは、甘えていると言うよりは、何か心もとない時にする事が多い。一見、元気な様子で振る舞っているが、どこか寂しかったりするのだ。今なら少し分かる。

僕は彼女の背と腰元を抱きしめた。

まだ僕は、ベルルを十分に満たしていないのだ。

「ベルル……この仕事が終わったなら、どこか遠くへ遊びに行こう。少し長い休暇を取って……その、新婚旅行だ」

「……新婚旅行?」

「ああ。美しい景色の見られる隣国に行こう。美味しいものを食べ、楽しい場所に行き、一緒にゆつくりしよう」

「……一緒に? ずっと???」

「ああ。旅行の間は、二人だけでずっと、一緒だよ。きつと楽しい……」

「……!!」

ベルルはやつと、バツと表情を明るくして、わーいわーいと両手を上げて喜んだ。

そしてまた、その勢いのまま僕に抱きつく。今度は、甘えるように。彼女が甘えてくる

時は、頭を撫でて欲しい時だ。

そしてその望み通りに、頭を撫でる。

「……楽しみにしてくれるかい?」

「ええっ!! ととてもとても楽しみ……っ!!」

「僕もだよ」

すつと出てきた、素直な言葉。

そしてふと思う。僕はこんなに素直な奴だったのだろうか。

あまり意識をしていなかったが、ここ最近、自分の思いを隠すより、素直に言葉にする事の方が少しだけ多くなった気がする。

そしてそれは、ずっと昔の僕の姿でもある。まだ僕が全てにおいて満たされていた頃の……

僕自身、ベルルに感化されているのだ。

それはきつと、とても良い方に。

家が没落し、ほとんど不可能に近い一家の再興と現実逃避の為、ただ淡々と仕事にだけ励んでいた時とは違う。

これからは違う。

ベルルと一緒に、ずっと、もつと幸せになる為に、頑張るのだ。

### 3 伝書

さて、いつものように王宮へ向かおうと自分の館を出たら、第七騎士団の若い騎士たちに囲まれた。

「……………」

「グラス様、副団長の命により、お迎えに上がりました」

「……は？」

とても間拔けな声を出してしまった。

状況についていけないうちに、僕は彼らの馬車に乗せられる。

「だ、旦那様……っ。これ、持って行ってちょうだい!!」

「ベルル……」

「お昼に食べてね……お仕事、頑張つてね……っ。そして出来れば、早く帰つて来てね……っ」

「……………ああ」

僕は馬車の窓からベルルの持つて来たバスケットを受け取り、彼女の頭をポンポンと撫でた。

ベルルはどこかウルウルしている。

ただの出勤に何と大げさな。

僕はまるで遠い町に連れて行かれて、長い出稼でかせぎにでも出るような感覚で、丘の上のベルルを見つめ続けた。

「あちらが噂の奥様ですか？ いや、本当に綺麗だなあ。羨ましい限りです」

「え、あ、ああ……」

僕より少し年下に見える騎士団の兵が、馬車の中で話しかけて来た。

「その、僕はいったいどこへ連れて行かれるのだろうか」

「はい。グラス様はこの研究チームの一員として、対策本部のラボを使って研究して頂きます。王宮の研究室並みに、何でも揃っていますよ」

「……対策本部のラボ？」

「ええ。植物園の側の、セントラルホテルの地下です」

「……へ？」

セントラルホテルと言えば、レッドバルト家の持つホテルの事だ。なぜそんな場所にラボが。

「なんでも、レッドバルト伯爵の趣味で、ホテルの地下に大規模な研究室を作っていたんだとか。今回そこを貸して頂けるようになって……あ、完全に副団長のコネというか……」

「……」

目の前の騎士は、それがいかに珍妙な事なのか分かっていない様子で、ごく当たり前のように語った。

ふざけている、あの伯爵。

王宮並みの研究ラボを作るのに、いったいどれほどの金がかかると思っているんだ。

しかもちゃっかり植物園の側という素晴らしい立地の、五つ星ホテルなんぞに。

「あ、何でも、この研究の間は、ホテルの施設を好きなように使って良いとの事です」

「いや結構。僕には、帰る家があるんでね」

「……そうですか？ 流石、新婚は違うなあ」

騎士のくせにやたらほわほわした青年だ。

僕は伯爵の考えている事が良く分からず、胡散臭いと思ってしまうばかりだった。

「あ、リノ。おはよう」

「……どういう事だオリヴィア。なぜこんな所で……」

ホテルの研究室に着くと、そこにはオリヴィアが居た。

「私だって今朝知ったのよ。しょうがないじゃない、騎士団の決定なんだから。私たちはこの研究の間は、第七騎士団の下に付く事になっているのだから」

「お前も選抜のメンバーなのか？」

「ええ。あと、クラウスも居るわよ」

「他には？」

「……それだけ」

「……」

はい？

僕は耳を疑いたくなくなった。

「いったいどういった選び方をしたら、このようないつもの顔ぶれになるのだろう。」

「何だかA班で実験していた頃を思い出すわね……」

僕は頭を押さえつつ、先が思いやられるなどふらつuitた。少数精鋭とは聞いていたが、まさか同級生の元班員たちというメンツで研究する事になるとは。

「おおおおつ、何だこれ何だこれ!! 朝起きて、出勤しようと思つて、なぜか連れて来られてホテルの地下ラボ!! フウツ!!」

「……」

「……おはようクラウス。困っちゃったわよね、いきなり」

七三眼鏡のクラウス・ドーナが、いつも以上にテンションを上げてやって来た。

こいつはこういった秘密の研究。みたいなノリが好きだ。

しかしよく考えてみると、第三研究室には優秀な研究員が多く居るが、中でもオリヴィアとクラウスはまだ若いながらも相当優秀な人材だ。

なにしろ、彼らの世代は黄金期と呼ばれ、天才ぞろいと言われていたから。

この若い僕にリーダーを務めさせる上で、やりやすいチームを作ったという事だろうか。それとも必然的に、彼らの力が必要となるという事だろうか。

ここで少し、学生時代の班員たちの話をしよう。

僕らは王都の魔法学校の、特に成績の良い者が入る上位クラスに在籍していたが、その中でもひと際異彩を放っていたのが僕の居たA班だった。

六人居た班員のうち、オリヴィアが班長で、僕とクラウスはただの班員。

オリヴィアは学年の首席争いをしていたほどの優等生だったし、クラウスは魔法式の計算にかけては誰にも負ける事はなかった。

僕は魔法薬学に関してなら教授たちと渡り合えると言われたほど突出した知識と技術を持つていたが、それ以外は並の人間であった。

現在では宮廷画家となったフィオナルド・コレーは、これまたとんでもない天才肌で、造形魔法学や自然魔法学、想像魔法学などあらゆる分野で特異な才能を持っていた。将来を期待されて第一研究室からスカウトもされたらしいが、本人に魔法への興味が無く、もっぱら芸術への愛情が先行し、今に至る。とは言え、画家としても才能があったのだから、それはそれで凄い。

残りの二人は、副班長であったウェルナー・セバリユスと、女子班員だったチエチーリ・エ・プリズ。

ウェルナーは正義感が強く戦闘魔法が得意で、なぜ魔法学校に居るんだというほど鍛え

られた体格をしていたので、研究室ではなく魔法兵の道へ。

チェーリエはふわふわした女性らしい生徒で、民俗魔法学の偉い教授の娘でもあり、そのままそちらの学者となった。

こんな特徴のある六人が集まったA班だったのだから、オリヴィアの苦勞は大変なものだったんじゃないかな。

「そもそも、妖精をゼリーにするなんて、どういった原理なんでしょうね」

「……僕が思うに、妖精の変化の力を強制的に発動させているんじゃないだろうか。妖精は好き勝手に、あらゆるものに変化する力を持っているから」

「なるほど。薬に、強制的にゼリーになるような魔法式を組み込んで、眠らせているって事か……」

僕らはまず、いったい今何が必要で、こういった情報が重要なのかをまとめ、魔法薬学の視点から考えてみた。

その中で、魔法薬品によって妖精が持つ変化の力を強制的に発動させているのでは……という推論に至った。

要するに、魔法薬はそれ自体が妖精をゼリーに変えたのではなく、妖精の変化の力に何かしらの命令を出しているのでは、という説だ。



もしこれが正しければ、逆に妖精たちを強制的に覚醒させ、元に戻るように促す魔法式を組み込んだ薬を作れば良いという事になる。

妖精ゼリーの現物だけはあるが、やはりどうしても妖精に関する専門的な知識が欲しいところだ。

「そろそろお昼にしましょうよ。大方の方向性は決まった事だし」

「このホテルのビュッフェ、食べても良いんだろ？」

「僕は良いよ、弁当があるし」

皆揃って、固まった肩を解すよう背伸びをしながら、ラボを出る。

オリヴィアとクラウスはホテルの豪華なランチビュッフェを頂краらしいが、僕にはベルルの作ってくれたランチボックスがある。

「くそ……見せつけやがって見せつけやがって!! この野郎っ、喉に詰まらせやがれ」

「リノにとっては、五つ星ビュッフェより愛妻弁当が大切なよ。良いじゃない……ほらっ」

クラウスは相変わらず何かぶちぶち言っていたが、オリヴィアが彼の白衣を引っ張って、連れて行ってしまった。

僕だけ休憩室で、一人のランチタイムである。

誰もいない部屋のソファで、ベルルの持たせてくれたランチボックスを開けると、綺麗な三角形のサンドウィッチが並べられていた。

## 立ち読みサンプル はここまで

定番のハムとレタスに、フワフワのオムレツサンド、チーズとトマトのサンド、ポテトサンド、ローストチキンのサンドまで。そういえば、最近オムレツを作るようになったと言っていたから、このオムレツサンドはきつと、出来合いを挟んだだけでなく、ベルルの手作りオムレツである。

パンの形も、何だか以前より綺麗な形に仕上がっている。ベルルはこういうところも上手くなったんだ!!

「……うーん……美味しい」

オムレツサンドの玉子は素朴な味で、優しい塩加減。ほんのり甘みがあるという事は、ハチミツを加えたのだろうか。

僅かに塗ってあるデミグラスソースが、玉子の味を引き立てている。

頭を働かせた分、腹が減っていたので、次から次に手が出て、あんなにあったサンドウィッチがすぐに無くなってしまった。

「……妖精か。僕らよりもっと妖精に詳しい専門家に、会いに行かないといけないな……」  
今後の事を考えつつ、部屋に用意されていたティーセットのお茶を飲んで、ホッと息をつく。

ちようどその時、腕に着けていた魔法結晶の腕輪が光った。なにやら空中伝書が届いたようだった。